

平成 22 年度入学式式辞

本日ここに集われた学部・大学院・特別専攻科への入学生のみなさんおめでとうございます。ご来賓の本学後援会の奥村会長はじめ副会長のみなさま、および列席の本学理事・副学長・学部長等とともに心からお祝いしたいと思います。学部入学生のみなさんは 18 年間あまり、今日を迎えるために受験等多大なエネルギーを費やされたことでしょう。ほんとうにおめでとうございます。

またこれまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまにも心よりお慶びを申し上げます。御家族のみなさまの今日に至る子育て時代は、少子化といわれる子どもの出生数の激減とともに、子育て困難といわれる時代でありました。今日に至るご苦勞を思いますと、特段のお慶びではないかと思えます。

さて入学者・進学者のみなさんは、これから始まる大学での新たな生活に大きな希望を抱いておられると思います。同時に新たな環境と人間関係への不安も心の片隅にあることでしょう。

和歌山大学教員約 300 人と職員約 200 名は、みなさんの希望をうけとめ、みなさんが希望を実現するために最大の支援をすることをお約束いたします。またみなさんの不安に寄り添い、きめ細やかな支援をすることをお約束いたします。

みなさんのなかには、入学式直前、3 月 25 日の新聞報道で、「国立大学初のランク付け」「地方国立大学は苦戦」という記事において、本学が 86 大学中下から 2 番目の 85 番目に位置していることに驚き、また不安にかられ、この大学に入学して大丈夫だろうかと入学手続きを躊躇された方もあるかもしれません。この国立大学ランキングにつきましては、本日詳しい見解を公表しますが、これは 2004 年～2007 年度の 4 年間の評価であり、今日のものではありません。またこの評価の方法が必ずしも適切なものではないことは、ランクを報道した新聞自体もコメントしておりますし、政権交代後の文部科学省の見解でもあります。和歌山大学には、誇るべき教育・学生支援の業績があり、研究や地域への貢献の蓄積があります。この長い歴史とその間に蓄積した業績を今後へと繋ぎ、より良い大学へと発展させるべく日々努力していますので、安心して下さい。

さてみなさんは、今日からの大学生活をどのようにイメージしているでしょうか。明日からどうしようかとわくわくしている人もあるでしょう。明日からどこへ行き、なにからはじめたらいいのかと戸惑っている人もあるでしょう。

親しく話し合えるともだちはできるのか不安に思っている人もいるでしょう。

希望とともに大きな戸惑いがあるのが当然です。いまから 43 年前に大学に入学した私も大きな戸惑いと不安を抱えておりました。

そこでまず第 1 にみなさんにお伝えしたいことは、戸惑い、不安、心配なことは、先輩、職員、教員にぜひ声をかけ相談してくださいということです。

幸い和歌山大学には、みなさんを支える教員、職員、先輩学生がたくさんおります。

第 2 にだれに声をかけていいかわからないまま不安が大きくなった人は、のちほど紹介する宮西教授がいる保健管理センターを訪ねてください。和歌山大学の保健管理センターは、深い悩みを抱えた学生を支援してきた実績をもち、いま広く注目されています。これは本日ご参加のご家族にもお伝えしておきたいことであります。

第 3 に授業への積極的参加はもちろんのこと、学生の自主的課外活動にもぜひ参加してください。これらの活動は、人間と人間の関係のあり方を学ぶ場であり、長い人生を生きていくために欠かすことのできない学びです。このクラブ活動には、多くの大先輩、ミドル、シニアの大先輩たちも支援してくださっています。これら大先輩たちとの交流は、社会の実際を学ぶことでもあります。またこれら大先輩はみなさんの卒業後の就職等の支援もしてくださっているのです。

第 4 に和歌山という地域で広く展開されているフィールドワークにもぜひ参加してみてください。和歌山という地域には、人情あふれ、若者を暖かく育てようという多彩な人々がおられます。地域での活動では、こうした人との出会いがあり、そのなかで今後の人生のモデルとも思える人を発見することもあるでしょう。

これからのみなさんの学びと活動は、以上のように教員、職員、先輩学生、そして後援会であるご家族のみなさんや、元気なシニアの方々を含む同窓会、そして和歌山という地域、すなわちオール和歌山大学、オール和歌山が支えています。

みなさん、和歌山大学への入学本当におめでとう。改めてお祝いの気持ちをお伝えし、和歌山大学を代表しての歓迎の挨拶といたします。

平成 22 年 4 月 5 日

国立大学法人和歌山大学

学長 山本健慈